

丈人力のススメ

堀内正範著

「人生九〇年時代」をこう生きる

『丈人のススメ 日本型高齢社会「平和団塊」が国難を救う』(武田ランダムハウスジャパン刊・二〇一〇年刊)

堀内 正範 著

元『知恵蔵』編集長

◎目次

はじめに 「平和団塊」の人びととともに(未)

第一章 世相 「現役人生六五年」をすくとして

第二章 家族 「ヒッペガシ娘」とツカエナイ親父」

第三章 モノ 途上国産中流品に囲まれて

第四章 居場所 四季と特性が息づく地域に

第五章 高齢期 エイジング・イン・プレイス

第六章 個人 住民・市民・国民として

第七章 国際 よろず佳き国際人として

第八章 新時代 「人生九〇年時代」をこう生きる

おわりに 「昭和丈人」のひとりとして(未)

「丈人」|| 「三世代多重型社会」を達成する「支える側」の高齢者。現役シニア。老人であり丈人である。

「丈人力」|| 丈人層が保持する生活力、生命力。大丈夫！の気概。人生の夢を深化・発展させる力。

「平和団塊」|| 平和の証としての「日本高齢社会」達成の中心になる戦後(一九四六〜五〇年)生まれ一〇〇万人の若き高齢者層。戦後ツ子。

25x17 2013.10.01 稿

第一章

世相「現役人生六五年」をすこして

*・*街談巷議の関心は悪事にある*・*

「荒唐の末のXデー」(二〇三*年暴動?)

若者の言はワル乗りを越えて「非を飾る」域にある。

「なまぬるい幸せなんか押しつけないでほしい。不幸な体験だつてしてみたい」

「戦場に出るなんて実感は人生の極みじゃないか」

「善意なんて何も生まないよ。悪意が行動のエネルギー源なんだ」

「毎日遊んでいるくせして、うるさいじいさんばあさんはいらない」

一回きりの人生だから、いろいろな体験をしてみたいという若者たちに、先人として幸せであることを願うことも、平和であることを望むこともできない。人間が隠

し持ついくつもの本性が露わになって時代は変わる。よしそれが愚かしい選択だとしても。

いまやちつとも稀れではない「古希」を通過し、「喜寿」に達したTさんは、行く先の暗闇から、姿を見せないデーモン(悪魔)の叫ぶ声が聞こえるという。

「敵が来るぞ、戦える軍備をしろ」

「病気の寝たきり老人は目立たないところで早く死ね」

「貧乏なら三食イモを食え」

若者の知は先回りして「諫をふせぐ」域にある。

近ごろTさんは、父母や少年の自分が蒙った戦時中の惨禍や戦後の混乱を、繰り返してほしくない不幸な体験として後人に伝えるという営為が、無力であり無益であると思うようになった。進み出したら引き戻せない「惨禍へのプロセス」を、またたどることになる気配。

かつて、といっても父祖の時代に世界不況があった。そのあと閉塞感が長くつづき、挙国一致の軍国化と国際的孤立と熱狂型の世論がささくれ立つなかで、国民の意

識と暮らしの振り子が、家庭（童謡）から国家（軍歌）へと大きく振れていく。そんな時期にTさんは四人の子どもの末っ子として生まれた。両親は明るい将来を約束できなかっただろうが、暗い家庭ではなかったと記憶している。子どものころ、「軍歌」を歌い、戦争ごっこをして遊び育った。

両親が直面していたとよく似たシーンに、いま自分が立ち会っているのではないかとTさんは感じている。衣装を替えた登場人物によって「歴史悲劇の再演」ということになるのではないか。

歴史は学ばない者によって繰り返し、学んだ者によって繰り返す。

いままさに、不況と閉塞感、財政難、金融緩和による格差の増大。それに軍国化と国際的孤立の気配。そして構想力ある政治リーダーの不在。売れるが勝ちのマスコミ紙、絶叫型の世論、エロ・ナンセンス。だれも回避する術を持ちえなくなつて不幸な結末を負うことになる

のは、何も知らない将来の子どもたち・・・。

しかし、Tさん。存在を黙止されて、なんの恩恵もないことに気づいて、「アベノミクスの仮想好況」に踊らされていない。「三〇〇〇万人の高齢者（六五歳以上）」がいます。これは歴史の繰り返しではなく、史上初のことではないですか。高齢者が持つ三本の矢「知識・技術・資産」という潜在力を發揮することで、この国の新しい「歴史をつくる」ことができるのではないですか・・・。

「・・・もう遅いような気がします」と、まっ白くなり薄くなった髪を撫であげながら、Tさんは真顔になつていて黙り込む。

「悪玉免疫抗体」

「好事は門を出ず、悪事は千里を行く」という風潮。

経済アナリストの分析よりもっと荒々しいのが、夕刊紙や週刊誌（女性雑誌も）やマンガ雑誌である。その多くは、一般市民が「荒廃の末のXデー」（二〇三*年暴

動?)を迎えるにあたっての免疫抗体を体内に造り出すために、毎号毎号、悪逆非道な人物たちを探し出しては、手を替え品を替えて内幕を暴きつづけてきた。

より強い「流行性荒廃菌」に対しては、より強い免疫抗体(対悪玉抗体)を体内に形成するためにである。

長いあいだ無防備のまま善意を信じて暮らしてきた高齢者には強すぎて理解できにくい域にある。拾えばペーシから溢れるほどあるもの、ここでは五〜六行分だけ、週刊雑誌の類から「荒廃ベクトル」をもった見出し語(「悪玉免疫抗体用語」)を並べてみよう。

狂気 抗争 挑発 怒号 罵声 悲惨 惨劇 醜悪
墮落 嫌悪 悪意 破壊 下流 地獄 逆襲 不法
非道 欺瞞 汚辱 凄絶 悪徳 横領 餓鬼 殺人鬼
修羅場 非常識 犬畜生 羊頭狗肉 魑魅魍魎 暴く
ぶつ壊す 騙す 危ない 破る 淫ら 潰し 酷い
大嫌い スッパ抜き いじめ ハレンチ アホ バカ
クビ ウソ ワースト ハルマゲドン・

街談巷議の関心が「シラジラしい善意よりドスグロい悪意」にあるというので、記者たちは悪意、悲惨、狂気に満ちたニュースを、鬼神に魅入られでもしたように競って追いかけている。日夜、話題は途切れない。

さあたいへん。本稿も「丈人力という欺瞞」「平和団塊などとは非常識」など、前出の見出しを貼り付けられて濁流にのみ込まれることを覚悟せねばならない。

「仕方ないすよ」と若者に同情されることになる。

高齢者を対象として、刊行をずらした隔週刊や月刊や通販誌には誠実に情報を送りつづけているメディアがあることは救いであるが。部数は遠く及ばずとも。

世代間に広がる亀裂

「待てない中年現役世代」

政治の「超大国アメリカ一極化」と経済の「途上国主導のグローバル化」によって、音を立ててきしみながら

新世紀へと舞台は回った。この激しい時流に覆われてしまったが、二一世紀の国際的潮流は「高齢化社会」であり、国連は一九九九年を「国際高齢者年」と定めて記念行事をおこない、新世紀での課題として各国に対応を要請したのだった。

アジア唯一の先進国として、世界最速の高齢化先行国として、この時流と潮流のふたつをかかえて世紀を越えた日本だったが、この一〇年余の際立った変容は、「若年化と女性化とIT化」という時流対応のものだった。

だからパソコンとケイタイを駆使する若い娘は、いつしか「わたしが主役！」として振る舞うようになり、「世の中ますます粗悪になる」とグチりつつけて定年を迎えた父を脇役とみるようになった。

つつがなく平和のうちに二一世紀に迎えるはずであった国際的潮流の「高齢化社会」は、先進国では「少子・高齢化」として対応が迫られており、わが国もそれに変わりはない。それを覆ってしまったのが、途上国主導の

「経済のグローバル化」であり、「アジアの共生（豊かさの共有）」への先進国日本の参入であった。激しい時流への対応が優先する。それは日用品の途上国産化と増加する非正規社員によって実感されている。

新世紀とともに国際的な「高齢化」が予測され、各国での「高齢社会」の形成が課題とされていたにもかかわらず、その構想とてないまま対策が遅れていたところへ、アメリカ市場で途上国の追い上げにあつて業績悪化にみまわれた日本企業が、生き残りの自衛策としてとった「リストラ」が、「若年化と女性化とIT化」と遅れての途上国進出とであった。

角度を変えて言い添えれば、わが国より一步遅れて成長期にはいったアジア途上諸国と向き合い付き合うための「日本途上国化」であった。

「先進国型の高齢化社会」を迎えるはずが「途上国型の若年化社会」に出くわしたのだから、日本の高齢者は二重の災難に見舞われることになった。その上に身に覚え

がない財政難による「年金」の減額や「医療費」の負担増、「消費税増税」といったシワ寄せとヒツペガシが次々に重なる。静かに推移するはずだった老後に、渦まくほどに状況悪化が予測されるに及んで、「おちおちしてられない高齢者」が急増しているのである。

そこに「もう待てない」と言い出して、いらだちに近い懸念や要請を高齢世代に示しはじめたのが、企業の生き残りのために身を挺することを余儀なくされている中年の現役世代だった。退職した先輩社友には理解できないほどに、社内事情はとくに中堅社員の立場は悪化しているのである。

「高齢者資産塩づけ論」

ことあるごとに「成果主義」を強いられる。正社員、アルバイト、派遣社員が混在して同じ職場で同じことをする。その上に実質賃金の目減り。企業の生き残りのためとはいえ、黙々と耐えてきた中年層の人びとの胸の

奥に、将来への不安がわだかまる。同僚との間でも同業者との間でも、親和の感性が少しずつ磨り減って働かなくなる。異次元の金融緩和による前払いによって企業は潤ったが、これから事業を起こして景気回復のために働くのは自分たちである。

そのうえ高齢者はなんなんだ。現役世代がムリして負担している年金を受け取りながら、スポーツジムに通い、旅行をし、レストランで会食し、次の時代に「われ関わらず」として暮らしているのではないか。

功労者としての高齢者に対する敬意とない混ぜになった胸のうちを右往左往していたらだちは、次第にふたつの方向に集約されて、個人的にもたしか懸念や要請として現役世代に納得されることになった。

ひとつは資産として動かずに留保されているという約一四〇〇兆円の家計黒字（両親の持つ貯蓄）。五〇歳以上の世帯が七五%まで保有しており、多くを抱えた高齢者が次の時代に関わりなく「引きこもり」の余生を送って

いる。ヨーロッパでは時代の推移と連動しながら人も動くしカネも動く。アメリカなら株式・出資金にまわるものが、日本では現金・預金（半分を越える）のまま動いていないのである。

そのため起きているのが資産の塩づけだ。

しかし高齢者としては、どこまでか判らない長い老後の不安解消のためには、底まで判った資産をたいせつにかかえこまざるをえない。そのために生じる社会的無関心が経済活動の効率を悪くし、企業活動の手足をしばっているというのが「高齢者資産塩づけ論」。

国側の財政を担当する現役官僚からすれば安定した黒字財源として動かないほうがいい。いずれ二〇年もすれば一過性のものとして、すべて相続税と遺産相続で動くことになる。声には出せないが、自分の高齢期に当たる。国家の赤字財政の担保としての家計黒字だから使って増えればいいが減らされると困る。常識的に納得される考え方であるが、これでは史上初の「高齢社会」は成立し

ない。高齢者が能力を出し合って、みんなが暮らしやすい社会をめざして、水玉模様のように小さな企業（ナノコーポ）を展開することでもいい。「知識・技術・資産」を動かすことだ。それが総体として若い世代も巻き込んだ「日本長寿社会」を構成することになる。長く遠慮がちに中堅経済学者が説いてきた正論であるが、応援団の登場でやっと本流になる。

「高齢者資産移譲論」

消費を活発にするためには、使わない高齢者から使手の若年者へ資産をトランスファー（移譲）すべきではないのかという「高齢者資産移譲論」が力を増す。新しい財界をつくる勢いの若手オーナーたちの持論。

いくら構造改革があがいても、景気回復でもがいても、いっこうに進まない要因が、高齢者層の支援の欠如にあるというものである。使わない、あるいは使えないなら必要としている若手に譲って資金を動かすことだ。

「高齢者資産移譲論」には孫世代にあたる若手の現役世代からおおいに賛同の声があがったが、さきころは「教育資金贈与」として一五〇〇万円までの非課税措置が決まった。こちらは次世代の育成のための「愛情口座」として若い母親から拍手が沸いた。高齢者がため込んだ資産をなんとか子・孫のために動かそうという外からのヒツペガシ支援政策である。

とはいえ資産はおいそれとは動かない。

本来はこの一〇年の間に高齢者が「安心して暮らせる高齢社会」の形成のために使われるべきもので、国の構想（グランドデザイン）が見えないゆえに機会を失ってきた貯蓄なのである。だから「使うにも使えない資金」になっている。

高齢者側にも言い分がある。企業内では若手にしごとを譲り脇役を余儀なくさせておいて、定年後には老後資金をねらうのか。自分たちの力でやりぬいてくれないと困るではないか。

「諸君が高齢者になった時のことを思えば、そう簡単にいえることではない」と、高齢者とりわけ若手高齢者の「団塊の世代」のみなさんは不快感を隠さずにいう。

世代間に亀裂がはいる。

といっても、高齢者だけが犠牲になっているわけではないのである。

決して少なくはない優れたIT青年たちが、技術開発の内向的な作業の中で行方を見失い、使い捨てにされて社会と断絶していく。若い女性も華やいでばかりはいない。アルバイトや派遣社員なのに能力にあまる荷重な実務を引き受けて体調を崩し、嵩じてはうつ病に陥り、外界との関係を遮断していく。

どちらも繊細な感性の持ち主ほど傷ついているのである。引きこもりの傾向は、正社員として即戦力を期待されて入社したものの、適性と将来に不安をつのらせて出社しなくなる「新入社員のニート化」としても広がっているのである。

そんな前後左右の不安状況に包囲されて、現状を支えている中年世代の人びとは、気づかないうちに「自己チユー」（自己中心主義）に陥ってしまう。これ以上すすむと国の骨格である働く人びとの全身が骨粗鬆症に冒されてしまう。

しかしここはこれ以上に世代間の亀裂を深めることに文字数を増やす場ではない。中年社員のみなさんは、これから本稿が論じる「高齢世代によるみんなのための社会」創出に期待して、先輩の果敢な挑戦を見守るのがいいと思う。得られる経済的な波及効果は将来にわたって大きいし、その成果はいずれは次世代の人びとの資産となるのだから。

*・*いさぎよい隠退の功罪*・*

「君子的ひきこもり」

現役が負担している年金を受け取りながら、次の時代

に「われ関わり知らず」として「引きこもり」の暮らしをしている、といわれてみれば、高齢者はだれにもそういう傾向があることを否定できないだろう。

かつては先輩の「いさぎよい進退」が、後輩に活動の場を残し、将来への安心感と励ましを与えてきた。

だれもが穏やかに「余生」に入れたころはもちろん、いま企業や組織の「高齢者リストラ」がすすめばさらに、すぐれた知識、経験、そして人格をもった人びとが、潔く職場を去っていったにちがいない。

「君子は進み難くして退き易し。小人はこれに反す」がそのまま理解できた。

後輩として、だれもがそういう後輩のために君子然として身を引き去って「ひきこもりの人生」にはいった先輩の姿を思い浮かべることができる。ほんのひとむかし前のこと。

しかしそれは「余生」が短かく高齢者が少なかったころのことで、本格的な高齢時代においては美談でもなん

でもなくなっている。

ここでは典型的な事例として、六五歳をすぎた三人の三様の高齢期の暮らしぶりを見てみよう。

「隠退ウーピース」(豊かな高齢者層)

Dさんは、君子然といえるほどの風采ではないが、広い額に細い目でとくに明るい声の笑い顔が安心感を与える温和な人柄の高齢者である。超ではないが並一流の企業を定年退職してのち、男の平均寿命である八〇歳までの残りの人生をあれこれ楽しんで暮らせると計算を立てた「君子的ひきこもり」の高齢者。

自分でも幸せな「隠退ウーピース」(豊かな高齢者層)だと思っている。会社人間だったから地域に知り人はいないが、同僚や学友があちこちにおいて、それにつかず離れずに暮らす妻と子ども。趣味も多く、何よりも広い額に汗して食材をえる「自作菜園」の自営が自慢である。

肝心の生活費はどうか。

公的・私的年金のほかには資産収入もあって、近居している娘や孫の支援、病気や不慮のできごと、車の買い換えや築二〇年を越えた住宅・設備の修繕(これがけっこう費用がかかる)、ふたりの葬儀などといった特別な出費のための「生涯準備金」(預金と国債・株式が半々)はいまのところ崩さない。それでも小遣いは月五万円以上。現状では引きこもりに不服も不安もない。

ありがたいことにデフレで目減りしつつづけていた資産が、異次元の金融緩和・株高で老後の暮らしを支える四〇〇〇万円にほどほどの補充をえた。住宅ローンがなく菜園がつくれる土地を残してくれた岳父に感謝している。正直に言えば、健康に不安はなくはないのだが、ことし一六歳で亡くなった木村次郎右衛門さんが、郵便局員をつとめて退職後は九〇歳まで農業をして長寿であったことに学んで、「農作業ができる間はつつがなし」と考えることで安心している。

岳父同様に住居と敷地のほかには資産を残すつもりはな

いから、多彩な趣味を楽しみ、旅行でも観劇でも食事でも会合でも、同僚から声がかかって必要な時には積極的に参加し、浪費もする。

一人暮らしの末に看取られずに亡くなったお年寄りの話や、友人たちの会で語られるだれその認知症や医療や介護の話を目にすると、ドック検査による健康状態も良好で、何の有訴もない自分が、めぐまれた楽天ウーピーズのひとりに思える。

「一陽来福型の高齢者」

時代が下降し頹廢期へむかう時期にあると感じているので、Dさんは「われ関わり知らず」と固く決めて、後輩が知恵を借りにやってくるのに対しても、「いまさら、世の中のために、わたしまで引き出すのはやめてくれよ」と、冗談としてではなくいつて態度を崩さない。それでも七〇歳を過ぎて、後輩からしごとに関する声がかからなくなり、みずからも気力・体力の衰えを実感する日は

さみしい。そんな日はテレビ批評もせず新聞も読まず、終日、気分の晴れないこともある。「君子的ひきこもり」の独居を愉しむ境地にはなお遠い。

「ウーピーズ」（豊かな高齢者層）と自得したところで、父祖伝来の土地を切り売りして億単位の資産を得て安全圏にいる都市近郊の「金満農家」と違う。「自営資産家」にすぎないから、経済のデフレからの脱却によって頼みの資産が確保されるのは個人的に歓迎である。

日々を静かにいていねいに過ごすDさんのような「一陽来復型の高齢者」が沈黙している間に、高齢者の資産を「塩漬け」とする世論を背景にして、現役官僚はさまざま手法で高齢者の預貯金を切り崩す政策を取り始めた。財政上のやり口にはDさんも、「後人として、あるまじき行為！」として不満を隠さない。

といって、引きこもりに徹した生き方を変えるつもりはなく、思いのほか早々とやってきた「高齢者じり貧人生」とつきあう覚悟だけは固めている。申し上げづらい

が、このままの状況で推移すれば、安全圏と考えているDさんほどの人ですら、生涯を安穩に過ごしかれるかどうかはむずかしい。

・ 赤字人生が男の美学 *・*

「生涯現役の跡継ぎ二世」

「親孝行進学」

Iさんは、父親の後を継いで中小企業の経営者になった「生涯現役の跡継ぎ二世」の高齢者である。Iさんは二〇年ほど前、平成になってすぐに四〇歳代なかばに二代目経営者となった。創業者の父親が元氣だった高度成長・繁栄期といわれた時期もやたら忙しかっただけで、とりわけ家が豊かになったわけではなかった。周囲の人がびとが世間並みに暮らせるようにと、父親がひたすら心を砕いているのを見てきた。

父親は経営者として教育（学歴）がなかったことを生

涯の負い目と感じていたから、「おまえは大学を出にやいかん」と口癖にいつて、家業の手伝いを強はず、子どもが高等教育を受けて意気揚々とした人生を送ることに期待しつづけた。晩年には「親孝行進学」で大学を出た息子が期待していた人生を歩んでいないことを知ることとなったが。

わが国の戦後復興期から高度成長期（一九五五〜七四年）のころに設立された中小企業では、Iさんのような跡継ぎ二世は決して少なくないだろう。技術を尽くして質の良い日本製品をつくりあげてきた実直な父親と労苦をともにしてきた社員に囲まれて育ち、いまは子どもとしてその跡目を継いでいる。同じような経緯をもつ機械製造の子会社（親会社ではない）から下請け品を求められれば、資金繰りをして設備投資を重ねても求められる製品を納めてきた。

そして迎えた「列島総不況」。

その後Iさんも人を減らしながら景気回復を待ちつづ

けてきたが、生涯現役で亡くなった父親には申し訳ないが、ここ五年ほどのきびしい経緯からみて、もはや再生の手立てはないところに来た。次第に負担の重くなる借入金を返済する余力が出ない。

「ほどほどの赤字人生」

「生涯現役の跡継ぎ二世」のIさんが引き継いだ父親のもうひとつの遺産である草野球チームも、若者が減って紅白戦が成り立たなくなった。「中小企業退職金共済」で定年は設けているが、父親のころから技術と意欲があつてしごとができるうちは文字通りの終身雇用である。だから効率のいいしごとが減り収入が減っても従業員には減収にならないよう給与は払いつづけてきた。がそれにも限度がある。

このまま推移しては、高齢になって先が読めなくとも「われ関わり知らず」などといつてはいられない。というより引くことなどできない。

「男というものは、きちんと仕事をすれば、どこで何をしても、ほどほどの赤字ぐらしをするものだ」というのが、父親がよく口にし、自分も受け継いだIさんの負け惜しみ半分の人生哲学である。

製造ノウハウを持つ親会社が生き残るために、まずは主要なパーツ以外は中国や東南アジアの途上国に生産拠点をシフトした。ついには製品化までとなれば、子会社ともども回復どころではない。「ほどほどの赤字人生」などともいってられない。

独自でのしごとにメドがたたず、下がりつづけた担保資産との見合いの末に、いずれ不良債権の処理対象として銀行から見放され、こちらの意欲が萎えるまでは、会社と社員と家族を守るつもり。個人的にはさしたるぜいたくもせず、父と同じ「先憂後楽」の心意気を貫いて、沈没船の船長よろしく自分だけは地獄へでもどこへでもゆくつもり。

「先憂後楽型の高齢者」

父の時代にゼロに始まって二代目の自分の時代にゼロに終わる人生を、Iさんは納得している。それはそれで男子のみごとな終始のつけ方もいえる。が、惜しいかな、「高齢社会」を多彩にし豊かにする「高齢化用品」のユーザーであり、メーカーであるという点でもまたゼロの人なのである。

Iさんの会社が蓄積してきたような独自の技術力は、孫請けではなく、高齢者の暮らしを豊かにする日用品のために活かして、自力製品で活路を開くことが要請されているのではないか。

Iさんたちのように、良質な製品の製造に努めて下請けの現場で自得した製品化の完璧主義を崩すことなく、熟年技術者を必要とする「優良日用品」製造の時期がきているように推察される。「先憂後楽型の高齢者」の保持している技術と経験は活かされねばならない。

・「貯蓄ゼロの日」へのカウント・ダウン*・*

「大幅増税と貯蓄取り崩し」

給与所得者は、ことし四月からの「改正高年齢者雇用安定法」の施行により、法的には定年が六五歳まで延びた。とはいえ退職を前にして業務替えになったり、収入減を余儀なくされながら「待ちの日々」を送ることになるだけで、就業者としての充実した日々には遠い。このままなんとか定年まで勤めて、行く末が不安な程度の退職金と年金を合わせ計算しながら、どう暮らすかに思い悩むことになる。高年社員の過ごし方については別項で論じることにして。

定年退職したばかりYさんは、技術畠ひとすじに三〇年余を会社勤めですごした。退職後も前職をいかして仕事があればと願っているが、このリストラ時代。「ハローワーク」には求職の登録をせず、失業率には計算されない潜在的求職者のひとりである。だから失業率5%以下

などという数字を信じてはいない。少ない退職金から、少くはない住民税を支払って急に重量感を失った貯蓄から、さつそく定期的収入が減った分の「貯蓄取り崩し」がはじまった。

先行きの不安は身辺に渦を巻いている。財政負担を軽減するための「公的年金」のカット。次第に現実味を帯びてきた「消費税の大幅増税」。長年つれそつてきた妻の持病といつ身に降りかかるかもしれない自己負担の「医療費」。企業業績の不振による「企業年金」の減額。まだ五年つづく住宅ローン。そしていつまでも独立できない子どもへの支援出費……。実は「ペイオフ」（預金の限度内払い戻し。一〇〇〇万円）に届かないほどの預金額だから、長生きすればいつか必ず訪れるにちがいない「貯蓄ゼロの日」への不安。

「戦々兢兢型の高齢者」

退職したあと職さがしをしているYさんは、旅行や観

劇、書籍・雑誌の購入、外食などを減らして「選択的支出の削減」に努めている。それでも生活用品や日常経費、医療費や税負担とくに際立つ健康保険料など「基礎的支出」が確実に増えることから、家計の先行きはとめどなくきびしい。

「貯蓄ゼロの日」へのカウント・ダウンは始まっているのだ。「薄氷を履む」ような日々が続くことになる。Yさんは多数派である「戦々兢兢型の高齢者」のひとり。「さして優れたことはしてこなかったけれど、一私企業でだったが、必死で働いてきたつもりで自分までが、高齢者になって見捨てられることはないだろう」と国の施策を信じている。長生きすればいつかまた「スイトン時代」がやってくるかもしれないが、それでも平和なら生きられるだろうとYさんは思っている。

通信機器の技術労働者であり、つい最近まで会社の主力製品のひとつになっていた機器の発案製作者。といってYさんは、一社員が発明対価（成果主義）を求めるの

は違うと思ってきた。

「将来への希望は現場の活力にある」と技術者であった経験から確信している。

自分は細身だったのでヘルメットは似合わなかったが、NHKの人気シリーズ「プロジェクトX・挑戦者たち」で、工夫を重ねて事業に貢献した人びと、いかにもヘルメット姿が似合いそうな人びとの姿をみ、話を聞くのが楽しみだった。番組が終了してずいぶん経つというのに、胸の奥に刻まれたように、気がつくといまも中島みゆきが歌ったテーマ曲の一節「つばめよ、地上の星はいま何処にあるのだろう」が体の中を繰り返し流れている。仲間との苦闘のあとを思いながら、溢れる涙をじつところへえていた技術者たちの顔顔はいまも忘れられない。

「バブル・不良債権」

「デフレ・スパイラル」

「アベノミクス」

「戦々兢兢」といってもYさんにはいまも活かせる技術がある。「先憂後楽」のIさんには技術とチャンスが残っている。「二陽来復」のDさんには余裕がある。

老後の生活設計など立てられず、ぎりぎりの年金だけを頼りに毎日先の見えない不安な日々をすごしている高齢者が刻々と増えているのだ。傷んでも家の修繕なんかにとってもお金をまわせない。

フツーの人にわかるように将来の姿や不況から脱け出る方法を語れる人がはいないものか。数字には強いが人間味が感じられない政治家や経済学者や官僚出の横文字好きのアナリスト。億兆円をわがもの顔で語る人たちである。テレビ番組に常連なのは、司会者も含めて、いずれ安全な「経済学の丘」の上から展望者であり、どうみても現場の痛みがわかるような人びとではない。だから将来の方策も不況脱出の方途も、痛みを感じている人びとを優先するものとはならない。

思えば「バブル・不良債権」で一〇年あまりを騒ぎつ

づけ、次には「デフレ・スパイラル」（物価下落、所得減少、需要減退、物価下落というらせん状の悪循環）をこね回した。その果てについて安倍総理が「デフレ脱却」のために異次元の金融緩和をおこなって「アベノミクス」（前払い政策）を起こして解決を図ったのだった。

九〇年代から新世紀を通じて日本経済の退潮を実感してきたから、一般市民はその間、右下がりの暮らしを納得してきたのである。

「数値に裏付けされた分析が、みんな正しかったとしても、国民を対処に立ち向かわせる人的パワーを燃え立たせる変革に結びつかなかったのではないですか」と、Dさんは静かに断定する。

「カネで人を動かす。働く人の実態も実感もないですよ。ましてや高齢者の人生なんか眼中にない」とYさんは不満をあらわにする。

Iさんは政治の恩恵の外にいて黙して語らない。